

黒田明伸 小銭の大問題

大きなボールと小さなボール二種類を混ぜて透明な箱に入れて上下に揺する。そうすると大きなボールが上へ小さなボールが下へと集まるのが目にみえてわかる。なぜ大小のボールが分離するのかを数理的に説明するのは容易ではないようだが、経験的には納得できるであろう。実は通貨の流通において相似した現象がおこっているのである。もちろん物理的な大小ではなく額面の大小のことである。

中世以来の二四〇ペンス＝一ポンドの通貨制度を現行の一〇〇ペンス＝一ポンドに切り替える前の一九六八年、必要な新硬貨の量を推定するため英国王立鑄造局はパークレーなどの銀行に依頼して支店カウンターで受領する硬貨の発行年についてのサンプル調査をした。すると平均して毎年一〇〇枚に二枚の割合で硬貨が銀行経由の流通経路からはずれているという予期せぬ結果が現れた。興味深いのは還流頻度が額面により大きな差があったことである。二シリング六ペンス硬貨が〇・九枚なのにに対し最小額面の半ペンス硬貨は三・七枚の割合で消失していた。五年経過すると一〇〇枚の二シリング六ペンス硬貨の場合は九五・六枚流通しつづけているのに半ペンス硬貨の方は八二・八枚しか働いていないということになる。硬貨を銀行と家計との間を上下運動する粒子だと考えると、低位額面通貨は高位額面通貨ほど上行せずより沈積する傾向が強いということになる。

現在の取引全体において現金決済はごく一部にすぎないし、さらに現金取引のなかでも硬貨

によるものは非常に小さい割合にすぎない。如上的なことなど所詮は「小銭」の小問題であるともみるむきもあろう。だが取引総額を基準に物事の重要性を測るこの視角には大きな見落としがある。それは使用頻度の問題である。一〇〇円硬貨を一〇〇回使うのと一万円札を一度使うのとは取引総量としては同じ一万円である。人々が財・サービスを日常生活において購買する営為において媒介機能を果たしているのは一〇〇円硬貨の方である。

現金で決済するということは取引において最大の自由度を行使することである。どれを、どれだけ、だれから、いつ、買うか（売るか）を最小の制約で決めることができるのであるから。小銭を不断に使うということは、日常生活を頻繁な最小制約取引で構成していることだということができる。ひいきにしている八百屋の帳面へ記入してもらって月末にまとめ払いという取引であれば硬貨需要は激減する。しかしそれは得意先以外と売買する可能性を放棄してしまふことである。

それならば硬貨をたくさん供給してやればよいのだろうか。問題は通貨、ことに小額面通貨は、上記のように沈積しやすく回収がむずかしいことにある。日常取引における自由度が高いほど通貨への依存が高いが、通貨依存度が高いほど通貨不足に悩むということになる。銀行制度がポンプの役割を果たさないとさらに深刻化する。小銭は実は大きな問題をかかえている。

くろだ あきのぶ／北海道生。京都大学卒。2002年より東京大学東洋文化研究所教授

中国を中心とした世界貨幣史を研究し『貨幣システムの世界史』（岩波）等を著す。貨幣間の補完性理論で知られフランス・ドイツで客員教授。International Journal of Asian Studies（ケンブリッジ大学出版会）編集長。